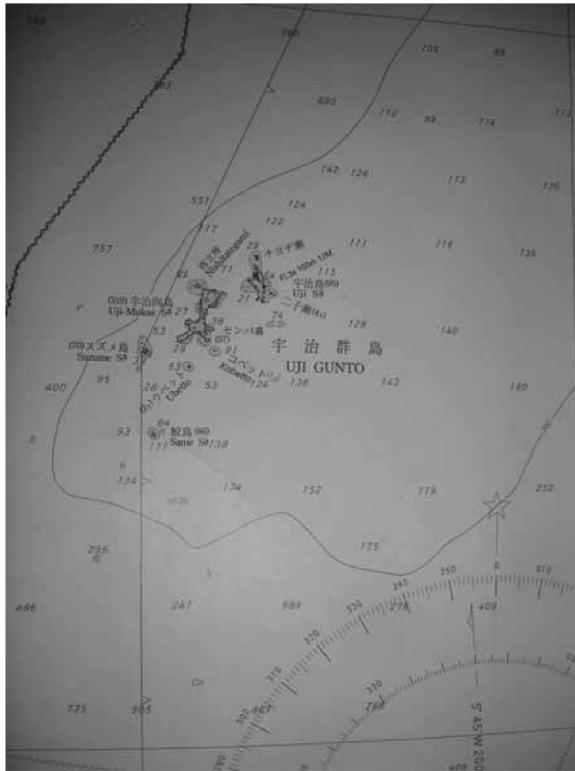


宇治群島：人間諸活動の痕跡と環境負荷調査
～史的形跡と総括的環境質のフィールド調査～

長嶋俊介
多島圏研究センター

Inprint of Human Activities and Environmental Disturbances
on the Uninhabited Island: Uji Islands
— Field Study for Check the Historical Trace and
the Quality of Comprehensive Environment —

NAGASHIMA Shunsuke
Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University



1 宇治群島の位置付け

坊津や笠沙、そして長島や甌島にとって、宇治群島は多年に亘り重要な漁場であった。坊津や枕崎から大正期トカラ海域→昭和期遠洋漁業・太平洋海域への進出前、近海漁場として極めて重要な位置付けをしている。地域経済基盤がまさに作られた時期になる。また長島や甌島では宝石珊瑚の採集に来ており、その量と質で、横綱(地域内ランキング)を競うほどであった。化粧廻し状の幕もそれら各地の博物館資料館には飾られている。

写真 1 漁の発展(坊津歴史資料センター輝津館)

坊津では、鹿児島全域の地域特性や個性を見直した「地元学」的地図づくりのパネルがあった。そこでは、宇治群島も天然記念物カラスバト・ヤマショウビンなどの飛来地・クロイワツクツクやマメクワガタ等の生息域として意識されている。

なお坊津には女島遭難者慰霊碑があった。明治 39 年 10 月 24 日 33 名の遭難碑であるが、刻印されたカツオ漁以外にも宝石珊瑚で有名な海域でもある。宇治群島は、その中継地点でもある。

漁場の連続性は、甌・長島から南下するルートでも言える。事実調査時点で、夫婦船漁師が、宇治島小浦波止に停泊して、船内で網作業をしていた。昭和 28 年鹿児島大学調査を受けての宇治群島開発計画に拘った時代を振り返ったホームページにも、甌島生活時代の記述が見られる。

東西のみならず、南北にもまさに連続海域である。坊津とほぼ同距離の笠沙も、同町内海域でもあり、こだわりが強い。

野間半島展望台で、方向を示すとともに「自然の宝庫」「野鳥の楽園」とする記述となっている。海の冒険館:笠沙恵比寿では写真 4「アドベンチャー・トリップ・ポイント」として位置づけている。だが残念ながら、笠沙町・資料館・売



写真 2 宇治群島「地元学」的認識



店での宇治・草垣群島関係の書籍・資料は、教育委員会作成の『笠沙町史』以外は皆無である。

島と鯨・カジキ漁の「遊びゾーン」に、意外な「環」の存在を提起している。甌島との間の海域(笠沙からは甌島は大陸の連なりのような広域性を感じさせる)、そこは内海面のような繋がりである。そこと無人島鷹島、野間半島からも見える津倉瀬、宇治・草垣と連続して、さらに黒島・硫黄島・竹島が連なる。まさに、連続的な円環状「クルーズゾーン」としての可能性は、「ブルーツーリズム」に関する、本土側からの展望を示唆するものでもある。黒島は枕崎・坊津・笠沙いずれからもよく見える。宇治群島もほぼその射程距離にある。

写真 3-4 笠沙町の宇治群島認識(野間半島)



草垣群島利用認識に興味深い県の行政判断が05年9月下された。串木野市開発業者の下ノ島2.7haでの岩石採取申請を却下した。①急峻で計画通り採石は困難。②表土で海汚染。水産業利益を損なう危惧。③搬出も困難で採算性・継続性に支障。④「草垣群島全体の自然環境や景観を損なう可能性」が理由。

無論上ノ島の鳥獣保護区特別保護地区への配慮もうかがい知れる。

国民的視座で守るべき価値認識が、無人島環境に対しても為される時代が、訪れている。重い認識として受け止めたい。無人島の環境公益性は、広域水面管理拠点、自然生命循環の起点としても重いが、景観としても認識されている。

2 宇治(家島)島

宇治島・向島の間は隼人の瀬戸、並びに諸島近海は小島が多いので、写真の通り、東海上に停泊した。灯台は95m南日岳の所なので、意外に低い位置で瞬

いていた。昆虫類の飛来はないが、飛魚・イカが集まりたもですくい取れるほどであった。近海の豊かさが偲ばれる。翌早朝ボートで小浦波止に上陸。

写真6は、高波にも対応する堤防上から、小浦波止

を見ている。長島の夫婦船と後に到着した写真の種子島船と出会った。10人程のグループで、毎年来ている。単なる釣り仲間以上の愛好家で、素潜り用具もあった。漁師小屋は畳を上げ板も激しくいたんでいた。窓ガラスはかなり残っており、鳥の死骸が数点あった。発電装置・無線関係を取り付けた場所後も確認でき

た。船を引き上げる大型の歯車や魚を煮る大鍋もさびて残っていた。ビン類・皿類は他の無人島に比べて著しく少なく、生活痕は薄い。水量は谷沿いに多い。飲料水取り口とタンクが残っていた。

南日岳・灯台から片浦波止側を見ると、比較的広い耕作可能斜面がなだらかに広がっていた。多くの調査

者は、そこから道を求めて、探索に入った。著者は、小浦波止から泳いで片浦波止に廻った。徒歩でも海岸・岩づたいに移動可能である。その手前一带で海洋生物調査が、6名で実施されていた。透明度は高い。

片浦波止に入り込むと、石垣で作られた畑が、予想外に各斜面に展開されていた。ただし住居跡・居住空間は、殆ど見あたらない。漁業が主であるので、季節限定の、かつ手間のかからない作物に限った栽培だったかも知れない。兎が一羽目の上斜面を走った。伏流水の流れが海岸に達していた。猛禽類も上空を飛んでいた。

写真5 南星丸停泊位置

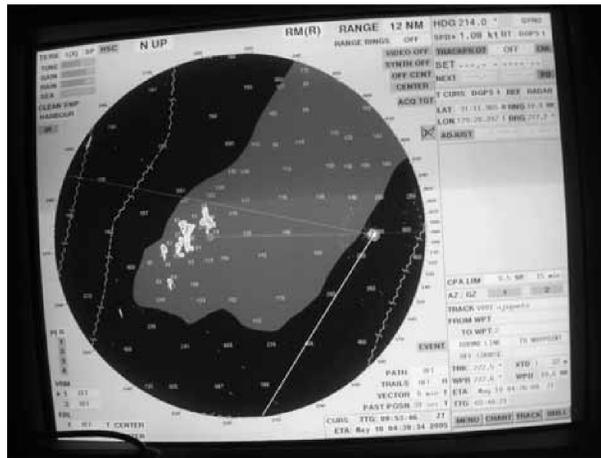


写真6 小浦波止(奥に老朽化した小屋がある)



3 宇治向島における漂着物の国籍調査

2004 年末核最終処分場誘致構想(ガラス固化・金属粘土緩衝材で地下 300m 以下に超長期埋設)とその顛末で、向島南部の堆積岩盤が適地かと話題となった。

「過去の火山活動がうかがわれる岩」「。沖縄トラフの北東部。沖合に活断層がある。」(南日本新聞 05/1/27)とする懸念が示されている。

調査員 5 名は、南星丸に、家島成果物を積み込み、続いて向島ビロウ湾に上陸。著者は、流藻採集物が中国沿岸部からと想定されるとのことなので、海岸部漂着物の国籍調査を行った。



写真 7 片浦波止と背後段々畑跡地(奥が広い)

なおビロウは斜面から頂上部にかかって繁茂している。まさに名前の通りの湾である。海岸ゴミ類は、波打ち際には少なく、2メートル程の高さから奥、大岩と大岩の溝2-3メートルの所にも、発泡スチロールをはじめとする漁具関連等のポリマーが、挟まっており、力を入れても簡単には取れない。荒海時集積を暗示

する。海岸部集積ポイントは写真の様に普通で、一見どこにでもある光景である。ただ、国産品や特に生活臭のするものが極端に少ない。

漁具・漁船生活用品廃棄・そして中国沿岸からのものが目立って多い。発泡スチロールを除く、ポリマー関係で国籍不明 5 割、日本 1 割(ペットボトル類)、中国 3.5 割、台湾 0.5 割、欧州 1 件であった。台湾と中国は会社の地名、使用漢字略字、産地国表示、インターネットアドレス等でかなりの確認が可能であった。中国のどこから来ているのかが、今回特に大切だったので、それらについても、小型レンズと接写機能を重ねて、可能な限り撮影した。



写真 8 向島ビロウ湾調査地点(対岸は家島)

中国からのものを列記すると、[磷酸 20 L 容器 made in China][ヒマワリ種菓子袋:浙江**公司=温州市梅嶼工業区][ペットボトル:中国名牌産品][同:杭州**公司=3本][同別会社][同:上海市][同:廈門**公司][缶飲料:廈門**公司][衛生用品液体入れ=略字][アイスクリーム袋=同][菓子袋:舟山定海**公司=舟山市(上海近郊)][同:別会社][同:北京市]

[小飲料容器:東莞市,略字][中飲料容器:浙江**公司=浙江金華市][台所用品 made in China]等。「浙江」と印字された網用浮きが 10 個以上あった。その内の一つが台州塑料厂(円内海・海草マーク)と記されていたが、その他のものは全て製造元不明だが、「浙*江」。*所が碇マークであった。流れ藻に巻き付いた浮きは発泡スチロールに紐を頑丈に巻いたものであった。安価な漁具そのものも、藻類の中国本土沿岸起源を傍証するものだが、海岸漂着物も傍証以上のものである。

写真 9 海岸部ゴミ集積ポイント



写真 10 中国産品漂流物(抜粋)

